EYES 011

松浦川・アザメの瀬地区自然再生事業

Azamenose Riverine Wetland Restoration Project

佐賀県唐津市
JR筑肥線「西相知駅」から徒歩15分

資料提供：国土交通省武雄河川事務所

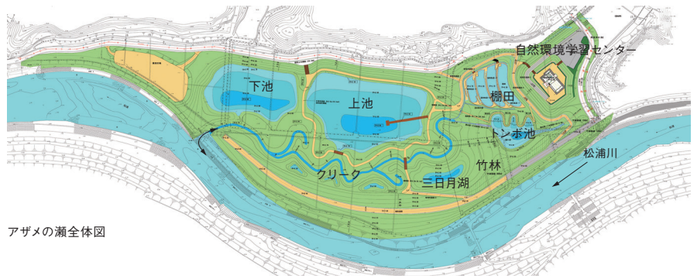
河川の自然再生から生まれる人と自然環境との関わり

佐賀県松浦川流域では、有史以来の水田の開発や河川改修により氾濫原湿地が大幅に減少してきた。また氾濫原湿地の代償をしていたと考えられる水田も、近年の圃場整備の影響によりその機能を果たさなくなっている。そのためドジョウやナマズなど氾濫原湿地に依存する魚類は減少し、それらの生物と接する機会も減少している。河川改修による堤防構築により川は閉鎖的な空間と化し、地域の人々と川とを遠ざけてしまった。

松浦川アザメの瀬は、約6haの水田を氾濫原としての機能を持つ湿地として再生する自然再生事業である。計画当初から地域の住民と行政関係者が集まり、学識者をアドバイザーとしたアザメの瀬検討会が設置され、調査・計画から施工段階、管理に至るまで、徹底した住民参加による議論が行われてきた。

アザメの瀬は、上池、下池、クリーク、三日月湖（大、小）、トンボ池、棚田により構成されている。クリークは棚田式の水田と連続しており、上流のため池からも水が供給され、本川につながっている。クリークの河岸高さは出水期に本川からの氾濫水が浸入できるよう、年に10回程度冠水する水位より0.5m低く切り下げられている。これにより、平水時には湿地的な環境を保ち出水時には流水が浸入する、氾濫原的な湿地環境が再生された。平成20（2008）年3月の整備完了から行われている調査では、湿地的環境を好む植物や出水時には魚類の産卵場となっており、多様な生物の生息環境が再生されつつあることが確認されている。

度重なる住民参加により合意形成が図られたことが背景となって、平成14（2002）年、アザメの瀬自然再生事業をサポートする住民組織「アザメの会」（現在はNPO法人）が立ち上がった。草刈りや棚田の維持管理のほか、地元の小学生を対象とした魚捕りや田植え・収穫祭など、毎年継続的な行事が実施されている。今日、アザメの瀬は地域の環境教育の拠点となっており、昔よく見ることのできた「川と人との関わり」も復活している。平成19（2007）年には自然再生事業の先駆けとしての意義と地域主体での事業推進の取り組みが評価され、公益社団法人 土木学会環境賞を受賞している。
（宮崎 大）



アザメの瀬全体図

整備前のアザメの瀬

整備後・通常時のアザメの瀬

整備後・出水時のアザメの瀬

アザメの瀬学習会の様子

地元の小学生を対象とした環境学習（魚捕り）

地元の小学生を対象とした環境学習（田植え）

アザメの瀬につくられた棚田と自然環境学習センター

アザメの瀬全景

EYES 012

首里城城郭の復元

Restoration Work of Shuri Jo Castle Stone Walls

沖縄県那覇市
ゆいレール「首里駅」から徒歩15分

資料提供：4.沖縄県立公文書館　5.沖縄県立図書館
撮影：1~3.6.大村拓也

首里城城郭の復元

首里城は、旧琉球王国時代最大規模の「グスク（御城）」で、美ら海水族館などとともに沖縄観光のハイライトの一つである。一般的な観光ルートは、まず守礼門をくぐって石畳の坂道を上がり、さらに幾つかの城門を抜けて有名な正殿の建つ中央の広場（ウナー（御庭））に抜ける道であるが、その途中で多くの人は、うねるようにして続く城郭の迫力にいやでも目を奪われることになる。熊本城のような典型的な日本の城の石積みとは趣がまったく異なっている。なんとも不思議な石積みである。全体が入り組んだ有機的な曲線で構成されており、最も目立つ隅角部の頂部には、隅頭石（すみがしらいし）と呼ばれる大振りの石が、鬼の角のように飛び出している。

明治維新後の明治12（1879）年に国王尚泰（しょうたい）が追放され沖縄県が設置されるまで、400年以上の長きにわたり王城の地であった首里城は、太平洋戦争末期の沖縄戦の激しい戦闘のなかで、文字通り「跡形も無く」消滅してしまった。その復元が本格的に始まったのは、戦後の城跡に建設されていた琉球大学が移転を終えた1980年代末からのことである。内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所発行のパンフレットには、以下のようにその経緯が記されている。

「昭和52（1977）年の琉球大学の移転に伴い、跡地利用計画が検討される中、第二次沖縄振興開発計画において首里城一帯の整備が提言され、さらに昭和59（1984）年には沖縄県が首里城復元整備の指針となる『首里城公園基本計画』を策定しました。昭和61（1986）年には首里城公園計画区域約18haのうち、外郭石積内側約4haを沖縄復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）で復元整備することが閣議決定され、併せて外郭石積外側の区域約14haを県営の都市公園事業として、また城郭は首里城城郭等復元整備事業として整備することになりました」

沖縄戦の猛烈な破壊とその後の琉球大学の造成により城郭がどこにあったかすら判然としない状況にあって、往時の姿を再現する取り組みは難航を極めた。多くの資料が戦災により焼失してしまっていたため、遺構発掘調査により確認された石積みの痕跡や基礎の位置、そして戦災を免れた写真や古絵図などを手がかりに、城郭の線形が割り出された。石積みの高さが不明の部分では、往時の城の姿を記憶している人々への聞き取り調査などから推定が行われた。

グスクのために継承された独自の石工技術というものは存在しておらず、発注者である国や県でも図面には出来形の寸法と石の積み方の形式（相方積、布積など）を示す程度で、あとは現場を任せられた職人の経験と工夫が頼りであった。復元工事が始まると工区毎に職人達が割り当てられ、それぞれが受け持ち範囲の石積みの全てを最後まで担当するという方式がとられた。城郭頂部に据える隅頭石もその工区を担当した職人の手で仕上げられた。石材は沖縄本島南部の具志堅村（現在の八重瀬町）、玉城村（現在の南城市）などの鉱山から調達された。所定の規格寸法よりも一回り大きな状態で現場に搬入された石材は、積み増す毎に一つ一つの継ぎ目が密着するよう型取りが行われ、手作業で整形がなされていった。構造計算を行ったところ、復元城郭の多くの部分で、往時と同じ断面形状では地震その他に対する強度が十分ではなく、補強の必要があることが判明した。それらの一つ一つについて、今日の土木技術を活かした補強対策が慎重に講じられた。

平成12（2000）年12月、史跡「首里城跡」は、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のなかの一つとして「世界遺産」に登録された。壮大な城郭復元の取り組みは、現在も少しずつ続けられている。（樋口 明彦）

1.御内原北側での発掘調査

2.石積み作業風景

3.外郭久慶門付近

4.戦災で破壊された首里城

5.旧首里城図
（昭和6（1931）年頃に作成された坂谷図）

6.寝廟殿付近から正殿を臨む